

## 第二部 日本語教育実践研究 2

## 平成 29 年度 日本語教育実践研究 2 実施概要

## 八巻 なごみ

## 1. はじめに

本稿では、筑波大学大学院人文社会科学部研究科において行われた日本語教育実践研究 2 の実施概要を報告する。本実践研究では、初級レベルの学習者を対象とする日本語クラスを実習用に開講し、実習生自らが受講生の募集やカリキュラム作成をはじめとするクラス運営を行う。さらに、教壇実習及び実習授業のビデオ録画分析等を通し、教師としての自己成長を目指す。今年度は国際日本研究専攻博士前期課程の 9 名が参加した。以下に本実践研究の実施概要を述べる。

## 2. 実習の流れ

今年度の日本語クラスは例年より 1 週間早い開始となった。表 1 に実習の流れを示す。

表 1 実習の流れ

| 年月日                       | 活動内容  |
|---------------------------|---|
| 平成 28 年 12 月 21 日         | 引き継ぎ  |
| 平成 28 年 12 月～平成 29 年 1 月  | 自主勉強会 (75 分×5 回)                                |
| 平成 29 年 4 月               | 受講生募集準備 (ポスター、チラシ、プレースメントテスト、Google フォーム等の作成)   |
| 平成 29 年 4 月 17 日～5 月 18 日 | 通常授業 (全 5 回) (アクション・リサーチ構想発表、教案指導、ミニティーチング他)    |
| 平成 29 年 4 月～5 月           | 受講生募集 (ポスター掲示、チラシ配布、受講希望メール受付) 並びにプレースメントテストの実施 |
| 平成 29 年 4 月～5 月           | 教壇実習準備 (教案・教材作成など)                              |
| 平成 29 年 5 月 25 日～6 月 29 日 | 教壇実習 (月曜 15:15～17:50) 反省会 (18:00～)              |
| 平成 29 年 7 月 20 日          | 反省会   |
| 平成 29 年 8 月 8 日           | アクション・リサーチレポート提出                                |

## 3. 実習準備

本節では、実習準備期間 (平成 28 年 12 月～平成 29 年 5 月) に行った活動内容について具体的に述べる。

## 3.1 引き継ぎ

指導教員立ち会いのもと、前年度の実習生より実習概要およびクラス運営のための業務についての引き継ぎが行われた。昨年度の実習スケジュールや各仕事の具体的な内容についての説明を受け、その後

実習生間で役割分担を行った。

### 3.2 勉強会

引き継ぎの翌週から、実習生主体の事前勉強会を行った。本教育実習は、教壇実習のみならず、授業の録画分析から自身の課題を見出し改善していくことで、教師として自己成長することを目的としている。そのための基礎知識として横溝紳一郎著『日本語教師のためのアクション・リサーチ』を購読し、アクション・リサーチ (以下、AR) の理論や具体的な方法を学んだ。また、今年度は勉強会の回数を前年度より 1 回分増やし、河野俊之・小河原善朗著『日本語教師のための「授業力を磨く」30 のテーマ』から初級の指導法や教案の作成法について学ぶ時間を設けた。

表 2 勉強会の内容

| 日程           | 内容                          |
|--------------|-----------------------------|
| 1 回目 (12/28) | 初級クラスの指導法、教案作成について          |
| 2 回目 (1/12)  | AR の定義と特徴、実施プロセスについて        |
| 3 回目 (1/18)  | 日本語教育における AR の実践報告例         |
| 4 回目 (1/25)  | AR トピックの見つけ方、予備調査、データ分析について |
| 5 回目 (1/30)  | AR テーマの構想発表                 |

### 3.3 受講生募集並びにクラス運営に関する業務

実習のための日本語クラス開講にあたり、受講生の募集並びにクラス運営に関する様々な業務を実習生間で分担し行った。仕事内容の詳細と担当した人数は表 3 に示す。なお、ポスター・チラシ、応募・連絡メール、受講希望者の登録用 Google フォームは英語と中国語で作成・対応した。

表 3 受講生募集並びにクラス運営に関する業務

| 実施期間      | 仕事内容 (担当人数)   |
|-----------|---|
| 実習準備期間    | <ul style="list-style-type: none"> <li>● メーリングリスト作成・管理 (1)</li> <li>● ポスター・チラシ作成 (2)</li> <li>● ポスター掲示・チラシ配布 (2)</li> <li>● 登録用 Google フォーム作成 (2)</li> <li>● プレースメントテスト準備 (1)</li> <li>● メール対応 (英語・中国語各 1)</li> <li>● 応募者管理 (1)</li> <li>● プレースメントテスト実施 (全員)</li> </ul> |
| 日本語クラス開講後 | <ul style="list-style-type: none"> <li>● メール対応・発信 (英語のみ) (1)</li> <li>● 教室の利用申請及び鍵の管理 (1)</li> <li>● 授業ビデオ録画 (3)</li> </ul>   |

### 3.4 募集とクラス分け

4 月中旬からポスター掲示・チラシ配布を行い、募集締め切り (5 月 20 日) までに 33 名の応募があった。応募者には Google フォームを通して名前・国籍、日本語学習歴、日本滞在歴などの基本情報の他、日常生活における日本語トラブルや、伸ばしたい日本語能力といった日本語学習のニーズを尋ねた。また、今年度の教育実習は国際日本研究専攻の大学院生が開講するクラス (木曜日) と日本語・日本文化学類生が開講するクラス (月曜日) の 2 クラスを設けることとなったため、希望曜日も確認した。

各クラスの受講生のレベル判定及び希望曜日未指定の応募者のクラス分けのために、応募者には個別にプレースメントテスト (表 4) を実施し、日本語レベルの判定を行った。木曜日開講クラスの構成は表 5 のとおりとなった。

表 4 プレースメントテスト

|   |  |      |  |      |  |
|---|--|------|--|------|--|
| <b>I ひらがな・カタカナ読み問題</b>                          |  |      |  |      |  |
| 表示されたひらがな・カタカナを読んでください。(PPT で表示)                |  |      |  |      |  |
| 評価 (○・△・×)                                      |  |      |  |      |  |
| すいか、おかし、さんぼ、おみやげ、としょかん<br>アイス、バター、パンダ、スリッパ、ロボット | <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="padding: 5px;">ひらがな</td> <td style="width: 50px; height: 20px;"></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">カタカナ</td> <td style="width: 50px; height: 20px;"></td> </tr> </table> | ひらがな |  | カタカナ |  |
| ひらがな  |  |      |  |      |  |
| カタカナ  |  |      |  |      |  |
| <b>II 数字聞き取り問題</b>                              |  |      |  |      |  |
| これから言う数字を紙に書いてください。                             |  |      |  |      |  |
| 評価 (○・△・×)                                      |  |      |  |      |  |
| 【 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 】から 3 つ                   | <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr><td style="width: 50px; height: 20px;"></td></tr> <tr><td style="width: 50px; height: 20px;"></td></tr> <tr><td style="width: 50px; height: 20px;"></td></tr> </table>                       |      |  |      |  |
|   |  |      |  |      |  |
|   |  |      |  |      |  |
|   |  |      |  |      |  |
| 【 10 25 18 37 44 63 】から 3 つ                     |  |      |  |      |  |
| 【 100 300 520 760 831 999 】から 3 つ               |  |      |  |      |  |
| <b>III 時間・値段問題</b>                              |  |      |  |      |  |
| 次の時間・値段を言ってください。(PPT で表示)                       |  |      |  |      |  |
| 評価 (○・△・×)                                      |  |      |  |      |  |
| 【 9:00 15:30 ¥198 】                             | <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="padding: 5px;">時間</td> <td style="width: 50px; height: 20px;"></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">値段</td> <td style="width: 50px; height: 20px;"></td> </tr> </table>     | 時間   |  | 値段   |  |
| 時間  |  |      |  |      |  |
| 値段  |  |      |  |      |  |
| <b>IV 会話問題</b>                                  |  |      |  |      |  |
| ① 今日は何で (どうやって) 来ましたか。or 自転車で来ましたか。( 点)         |  |      |  |      |  |
| ② ここまでどのくらいかかりましたか。or ここまで何分くらいでした。( 点)         |  |      |  |      |  |
| ③ このテストはどうでしたか。( 点)                             |  |      |  |      |  |
| 【オプション】日本の生活はどうですか。or 日本はどうですか。( 点)             |  |      |  |      |  |

|  |  |    |   |
|--|--|----|---|
| <p>0・・・質問が理解できず、全く答えられない。</p> <p>1・・・質問が理解でき、単語で答えられる。</p> <p>2・・・質問が理解でき、センテンスで答えられる。</p> | <p>評価 (0～2点)</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="text-align: center;">合計</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">点</td> </tr> </table> | 合計 | 点 |
| 合計   |  |    |   |
| 点  |  |    |   |

表 5 クラス構成

|        |   |
|--------|---|
| 受講者数   | 9名  |
| 国籍     | インドネシア (2)、キルギス (2)、トルコ (2)、アルゼンチン (1)、フランス (1) マレーシア (1)         |
| 日本語レベル | ゼロ初級 : 2名<br>平仮名・片仮名が読め、数字を聞き取れるレベル : 5名<br>簡単な会話ができる (初級前半) : 2名 |

受講者が応募者の 33 名から 9 名に減ったのは、月曜日開講のクラスを希望する応募者が多かったためである。木曜日を希望した応募者が少なく、レベルが同程度の学習者を一定数確保することが難しかったため、レベルの異なる学習者が混在するクラスとなった。

### 3.5 ミニティーチング

日本語クラス開講前に、通常授業内でミニティーチング (模擬授業) を行った。教員及び実習生が学習者役となり、一人 15 分の時間枠で、各自作成した教案から導入部分を中心に抜粋して授業を行った。

## 4. 教壇実習

本節では、5月25日から6週間に渡って行った教壇実習について述べる。今年度は9名の実習生が3つのグループに分かれ、各グループ2週ずつ授業を担当した。1日の授業を45分×3コマ (全18コマ) とし、一人2回教壇実習を行った。

### 4.1 実習の方針

本教育実習の基本方針は、文型を積み上げるのではなく、場面シラバスを用いて生活に必要な話し言葉を中心に授業を行うことである。毎回の授業を通して学習した項目を学習者が生活の中ですぐに使えるようになることを目指し授業を行った。また授業を行う上で、媒介語を使用せず直接法で行うこと、文字を使用しないことが条件であった。これは多国籍の学習者が混在するクラスに対応できるようにするためである。

全ての教壇実習は、アクション・リサーチのために教室内の2台のカメラで撮影した。教壇実習を行った教室には観察室があり、各週の担当教員 (2～3名) 及び他の実習生が授業をリアルタイムで見学した。1日の授業 (3コマ) 終了後には毎回全体での反省会を行った。

### 4.2 カリキュラム

本教育実習では既存の教材を使用せず、学習者のレベルやニーズを考慮しながら実習生間の話し合いを行い、カリキュラムを作成した。カリキュラムの概要を表6に示す。なお、各週の具体的な到達目標

や学習内容などは報告書に記載されるため、本稿では省略する。

表 6 カリキュラム (概要)

| 週 (実施日)      | 場面・機能     | 内容                           |
|--------------|-----------|------------------------------|
| 第 1 週 (5/25) | 自己紹介      | ・基本的な自己紹介をする<br>・わからない言葉を尋ねる |
| 第 2 週 (6/1)  | 道を尋ねる     | ・行き方を尋ねる                     |
| 第 3 週 (6/8)  | アパレルショップ  | ・アパレルショップで服を買う               |
| 第 4 週 (6/15) | 郵便局／依頼・誘い | ・郵便局で手紙、荷物を送る<br>・友人に依頼をする   |
| 第 5 週 (6/22) | 病院／薬局     | ・病院で診察を受ける<br>・薬局で薬を買う       |
| 第 6 週 (6/29) | レストラン     | ・レストランで注文する<br>・クレームを言う      |

#### 4.3 教壇実習後の活動

各週の教壇実習終了後には毎回 1 時間程度の反省会を行い、その週の担当教員とすべての実習生が参加した。まず授業を担当した実習生が各自反省点や課題を述べ、その後すべての実習生がコメントをし、教員からのコメントを受け、今後の授業で改善していくべき点などについて議論を行った。

#### 5. 今年度の教育実習を終えての評価と課題

6 週間の教壇実習終了後、今年度の教育実習全体についての反省会を行った。反省会において出された意見を「評価できる点」と「反省点」に分けて以下にまとめる。

##### 【評価できる点】

- 全ての活動を実習生が主体となって行ったことで、実習生間で試行錯誤を重ね、活発な意見交換をすることができた。
- 実習後の反省会でのコメント力が伸びた。授業観察・反省会の回数を重ねていくうちに、他の実習生の授業を観察する際に着目すべき点が明確になり、的確なコメントができるようになった。

##### 【反省点】

- 受講生募集や教室運営に関わる業務では、実習生間で仕事量に偏りが出てしまった。引き継ぎの段階で仕事内容を詳細に把握した上で役割分担を行う必要があった。
- 教員との連携が不十分であった。今年度から実践研究 2 の担当教員の体制が変わったこともあり、教案指導等を十分に受けていなかった。また、教案作成以前のカリキュラム作成の段階から、担当教員の指導を受けるべきであった。
- グループ間の連携も不足していた。カリキュラムだけでなく、各週の具体的な到達目標や学習項目

についても事前によく打ち合わせをし、毎週の授業に繋がりを持たせ、6 週間の授業を通して何ができるようになるのかを学習者にはっきりと示すことができればより良かった。

- ニーズ調査が不十分であった (伸ばしたい日本語能力 (選択式)、日本語が分からず困った経験)。より詳細なニーズ調査をしていれば、より学習者のニーズに合った授業をすることができただろう。
- 一人 2 回の教壇実習は、アクション・リサーチを行うには不十分であった。実習生は皆教師経験がほとんどなく、各自の課題が何であるかもはっきりしないまま教壇実習を迎えてしまい、「課題を明確にし、改善を試み、改善・達成を振り返る」という AR に必要なプロセスを充分に行うことができなかった。この点は、教壇実習に入る前に、通常授業やミニティーチングの中で各自の AR 課題をよく検討し、また 1 コマを 2 名で分担するなど一人あたりの教壇実習の回数を増やすことで改善が見込めるだろう。

## 6. おわりに

以上、平成 29 年度日本語教育実践研究 2 の実施概要を述べた。本実践研究を行う中で、山のような課題に不安を感じ、様々な問題に直面しながらも、実習生間で協力し一連の教育実習を終えることができた。反省点は数知れないが、日本語クラスを一から立ち上げ、試行錯誤を重ねたことは、すべての実習生にとって貴重な経験となったであろう。今回の経験を糧に、各々が今後の教育・社会活動において飛躍できることを期待したい。

## 参考文献

- 河野俊之・小河原善朗 (2006) 『日本語教師のための「授業力を磨く」30 のテーマ』アルク  
横溝紳一郎 (2000) 『日本語教師のためのアクション・リサーチ』凡人社

## 日本語教育実践研究2 実習報告(A)

八巻 なごみ、楊 雅、章 志鵬

## 1. はじめに

本稿では、平成29年度日本語教育実践研究2において筆者らが行った教育実習について報告する。

## 2. 1回目の教壇実習

筆者らのグループは、第1週(5月25日)に1回目の教壇実習を行った。以下にその詳細と振り返りを述べる。

## 2.1 1回目の授業

第1週の授業のため、受講者について知ること、また6週間の授業を共にすることとなった受講者間での交流を促すことを目的に、自己紹介をテーマとした。3コマの授業を通して出身・趣味・職業を言えるようになるように、各コマの学習目標を段階的に設定した。授業概要を表1に示す。

表1 1回目の授業概要

|                 | 学習目標   | 学習項目(一部)   |
|-----------------|--|--|
| 1コマ目<br>(担当:八巻) | <ul style="list-style-type: none"> <li>基本的な挨拶ができる</li> <li>基本的な自己紹介ができる</li> </ul>             | <ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶表現(おはようございます。こんにちは。など)</li> <li>はじめまして。(名前)です。</li> <li>お国は?/(国)から来ました。</li> <li>よろしくお願いします。</li> </ul> |
| 2コマ目<br>(担当:楊)  | <ul style="list-style-type: none"> <li>自分の趣味を言える</li> <li>他人の趣味を聞ける</li> </ul>                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>趣味に関わる単語</li> <li>私の趣味は~です。</li> <li>~さんの趣味は何ですか?</li> </ul>  |
| 3コマ目<br>(担当:章)  | <ul style="list-style-type: none"> <li>わからない日本語表現を尋ねることができる</li> <li>自分の職業を言うことができる</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>わかります/わかりません</li> <li>~は日本語で何ですか</li> <li>職業に関わる単語</li> </ul>   |

## 2.2 1コマ目

1コマ目では、第1週の1コマ目であるため、基本的な挨拶と自己紹介をテーマとした。授業を行う上で、自身のアクション・リサーチ(以下、AR)のテーマである「学習者の発話機会を増やすこと」を目指し、教案作成時に以下の2点を心掛けた。

- ① 教案には教師の台詞を記入し、授業中の余計な発話を減らす。
- ② ペア練習を多く取り入れる。また、授業の主な内容が「自己紹介」であるため、決まったペア同士で練習するのではなく、初対面である他のクラスメートとランダムに交流するように指示



する。

授業後の反省会においては、「教師の発話が計算されており、学習者を混乱させなかった」こと、「学習者が複数のクラスメートと積極的に交流していた」ことが良かったという意見があった。これらのコメントから、筆者が目標としていたことはある程度達成できていたことがわかる。その一方で、改善すべき点としては「学習者のレベル差への配慮が足りていなかったこと」、「形式的な練習の占める割合が高かったこと」などが指摘された。

教師の発話に関しては、教案に台詞を記入し、その通りに授業を進めたため、学習者を混乱させるような発話はなかった。しかしながら、学習者も教師が「言ってください。」「練習してください。」などと指示した内容のみを発話しており、全体的に形式的な練習の占める割合が高くなっていった。ペア練習の様子を振り返ってみても、目標としていた「ランダムに交流すること」が達成され、学習者は様々なクラスメートと交流していたものの、パワーポイント(以下、PPT)で提示したモデル会話の練習を終えると、多くのペアが「学生ですか。」「いつから日本にいますか。」といったことを英語で会話していた。学習経験のある学習者にとっては、モデル会話は易しい内容であり、ゼロ初級の学習者であっても、他の学習者のサポートもあり比較的容易に会話を行っていた。加えて、教案上でペア練習にける時間を長く設定していた上に、時間に余裕もあったため、英語で交流する時間が長くなってしまったことは、反省すべき点である。学習者数も8名と比較的少人数であったため、ペア練習中の机間巡視を徹底し、モデル会話を終えたペアには一歩進んだ表現を導入することもできただろう。

1回目の教壇実習を通して、教案作成時に目標としていたことは達成することができたものの、ただ単に学習者の発話機会を増やすのではなく、「何を言わせるか」が重要であるということを学んだ。

### 2.3 2コマ目

2コマ目では、1コマ目と関連して趣味の言い方を導入し、趣味を取り入れた自己紹介ができることを目標とした。授業中はできるだけ教師の一方的な発話を避けるために、会話の練習だけではなく、新出語彙の導入にも学生が積極的に発話できるような活動を設定することを行動方略とした。具体的には、PPTで新出単語を表すイラストを示し、順番に学習者に推測させ発話させた。また、学生一人一人を指名して「〇〇さんの趣味は？」という現実によくある内容で質問し答えさせた。学生が答えた単語に合ったイラストを示すことによって、意味確認を行った。

授業後の反省会では、授業の雰囲気が良く学習者が積極的に授業に参加していたこと、また笑顔で明瞭な声で教えていたことが評価された。

反省点としては、まずイラストの示し方が挙げられる。イラストの提示にPPTを用いていたため、イラストをランダムに見せようとした際にスライドの変更に時間がかかり、学習者が沈黙したまま待っている時間があつた。さらに、1つのスライドに3つのイラストを表示したため、教師がどれを指しているのかわからず学習者を混乱させた場面もあつた。このことから、次回の授業ではイラストの示し方を改善する必要があると考えた。

また、語彙の導入に力を入れすぎたため、会話ではなく単語中心の授業というイメージが強くなっていた。1回の授業で扱う単語数を考え直す必要がある。

さらに、授業の最初にPPTのイラストを使って単語を導入し、その後「〇〇さんの趣味は？」尋ねた

ところ、学習者は導入した単語のみを用いて答えており、練習した単語を代入するだけの形式的な練習となっていた。筆者が期待した「学習者に本当の趣味を言わせる」ことを達成できなかった。改善策としては、「趣味」という単語の概念を入れた後で、2~3つの単語のみを導入して「〇〇さんの趣味は？」と尋ねることで、学習者の言いたいことを引き出すという方法があると知った。教師が一方的に語彙を導入するのではなく、学習者のニーズや反応に応じて導入法を工夫する必要があることを学んだ。

#### 2.4 3 コマ目

3コマ目も自己紹介の続きである。さらに、自己紹介に加え「わからない日本語表現を尋ねることができる」という目標も設定した。積極的に日本語を使い、わからない表現を周りの人に聞くうちに、学習者が自ら新しい日本語表現を身につけられるようになることを期待した。

授業の流れを述べる。まず、2コマ目の内容を簡単に復習した上で、新しい単語と「～は日本語で何ですか。」という文型を導入した。その後、新出単語と新文型を含んだモデル会話を提示した。文型導入の段階では、PPTに提示した単語・会話に加え、臨場感を与えるためにレリアを活用しながら学習者に文型を練習させた。その後、準備した練習用シートを用いて、ペアでわからない言葉を互いに聞き合う練習を行った。この練習では、「～は日本語で何ですか。」という文型を練習する中で職業に関する新出単語を学ぶことができるようにした。練習後の発表では、職業を加えた簡単な自己紹介ができるようになったことに加え、練習した文型を積極的に使ってわからない表現を聞く学習者もいた。

反省点を以下に述べる。まず、授業内の説明および活動指示が理解されにくかった。学習者が次に何をすれば良いのかわからず戸惑う様子が見られた。そのため再び確認を行ったが、これが授業のリズムを崩す原因となった。また反省会では、説明を繰り返すことで教師の発話が多くなり、学習者が話す時間、つまり練習時間が相対的に短くなっていくと指摘された。初級の学習者にとって、教師の話全てを理解するのは困難であるため、説明をして理解させるよりも、話す練習の中で定着させる方が効果的だと考えられる。

さらに、授業内容の面から見れば、自己紹介の補足として職業の言い方を導入したが、「わからない言葉を聞く」というテーマは2コマ目までの授業との関連性が弱かった。さらに、学習者が「職業は学生です。」という不自然な発話をした際に、速やかに訂正できなかった。訂正しなかったことで学習者が不自然な言い方を覚えてしまい、実際の場面で誤用する可能性が高いので、教師として深く反省すべき点である。

#### 2.5 1回目の教壇実習を終えて

1回目の教壇実習は、全体的に教師が一方的に教える「教師中心の授業」となっていた。そのため2回目の授業では、学習項目を検討する際に「学習者にとっての必要性」を最優先に考え、「学習者にとって役に立つことを教えること」をグループの目標とした。

### 3. 2回目の教壇実習

2回目の教壇実習は第4週(6月15日)に行った。

#### 3.1 2回目の授業

第4週の授業概要は表2のとおりである。

表2 2回目の授業概要

|                 | 学習目標                                | 学習項目   |
|-----------------|-------------------------------------|--|
| 1コマ目<br>(担当：楊)  | ・郵便局で手紙や荷物を送ることができる                 | ・これ〜でお願いします。<br>・これ〜で送りたいんですが…。<br>・郵送手段に関わる単語               |
| 2コマ目<br>(担当：章)  | ・友達に依頼して、読めない書類の情報を教えてもらうことができる     | ・〜てもらえませんか。  |
| 3コマ目<br>(担当：八巻) | ・日付、時間等を正しく言える<br>・友達と日程を相談することができる | ・日付、曜日、時間<br>・一緒に行きませんか？<br>・○日（曜日）はどうですか？<br>・○日（曜日）はちょっと…。 |

### 3.2 1コマ目

前回の授業の反省から、絵カードの示し方、導入する単語の数、また学習者にとっての必要性に対する配慮などから授業のデザインの改善を行った。

まず、イラストはPPTだけで示すのではなく、絵カードも準備した。PPTで単語を教えた後で、学んだ単語の意味を確認する際、絵カードを使用しランダムに見せた。学習者を混乱させないため、絵カードの選択や絵の並べ方などに注意を払った。さらに、学習者にとっての必要性に配慮し、単語の数や会話の練習などを工夫した。単語の数については、単語の授業になってしまうことを避けるために、必要性の高い単語だけを取り上げ、絵カードを準備した。会話の練習では、学習者に二つの場面から自分が練習したい場合を選ばせた。例えば、郵便局という場面では「手紙を送る」と「荷物を送る」二つの場合がある。まず二つの場合の会話を学んだ後、学習者に練習したい会話を選ばせ、教師が郵便局員役になり会話練習を行った。

授業を振り返ると、全体的に絵カードの示し方や学生にとっての必要性に対する配慮が改善した。導入単語数を減らしたことにより、単語中心の授業というイメージがなくなった。また、PPTのイラストの他に絵カードを用意したことで、単語の意味確認をスムーズに行うことができた。

一方で、学生にとって覚える必要性の高い単語とそうではない単語があったことは反省すべき点である。郵送方法を表す単語が多かったが、それは学生にとって理解しなければならない内容なのか疑問だという意見が反省会で挙げられた。郵送方法よりも、郵送方法を説明するときの「安い」「高い」などの形容詞の方が実用性があるだろう。また、何を送るかによって郵送方法を選ぶ人も多いことから、送る物の絵カードを準備し、学生に郵送方法を選ばせて会話を行うという活動を入れることも効果的であると学んだ。

### 3.3 2コマ目

4週目の授業であるため、学習内容の難易度を意識的に高めた。学習者が日本で生活する中で遭遇しやすい「困った状況」を想起し、「漢字が多く書かれた書類の情報を友達に教えてもらう」というテーマ

を設定した。

1回目の反省点を受けて、授業では教師の発話を減らすことを意識した。授業の流れは、まず1コマ目の内容を簡単に復習した後、実際の不在票と保険の書類を見せ、書類の情報がわからない場合の依頼会話を導入した。加えて、再配達を予約する方法も紹介した。次に、「～てもらえませんか。」の文型について、会話文を用いて意味用法を説明し、文型挿入を行ったその後、日常生活でよく遭遇する状況を取り上げて文型練習を行った。最後に友人に依頼をするロールプレイ練習を行った。

今回の授業で工夫した点は、学習した項目を使って日常生活での問題を自分で解決できるようテーマを設定したところである。一方で反省すべき点もいくつかある。まず、文型説明をした際、簡単に紹介し理解させるだけで十分である項目を、あえて展開し難しい言葉で説明した。そのため授業の要点が曖昧になり、学習者を混乱させる要因となっていたと指摘された。難しい言葉を理解させるために、またやさしい言葉で言い換える必要があるため、教師の発話を減らすという目標は十分に達成できなかったと考えられる。学習内容をわかりやすく説明するために準備の段階では、教師としての話をさらに工夫することを要求しているとわかった。次に、「～てもらえませんか。」という文型を導入したが、実際の生活における使用頻度は高くないため、授業の主要な学習項目として導入する必要があるのか疑問があると指摘された。これは、教師が教える必要があると考えるものと、学習者が本当に必要なものとが一致していなかったが故の問題である。学習者が授業の主体であることを常に意識し、限られた時間で教えるべき内容を慎重に検討する必要がある。

### 3.4 3コマ目

3コマ目では、2コマ目の内容の続きとして、依頼後の日程相談をテーマとした。また、1回目の教壇実習の反省と他グループの授業の見学から学んだことから、2回目の教壇実習では「できるだけ文字を使用しないこと」、「ペアでの会話練習に重点を置き、学習者の本当に言いたいこと引き出すこと」を意識した。1回目の教壇実習ではゼロ初級の学習者への配慮として、文型やモデル会話を仮名とローマ字を用いて提示していた。しかし、授業見学などにおいて学習者が文字を読むことに苦戦し、モデル会話を一通り読むことで会話練習を終えてしまう様子が見られた。実際のコミュニケーションにおいては文字による補助はない。そこで、2回目の教壇実習では文字を使用せず、会話は音声で提示し、扱う表現はできるだけ単純化した。さらに、1回目の会話練習では学習者同士が英語で会話する時間が生じたため、2回目の教壇実習ではペア練習中の机間巡視を徹底し、できるだけ日本語を用いて会話させることを目指した。

日付・曜日・時間の言い方の練習では、1回目の教壇実習のような形式的な発話が多く見られたものの、学習者に身近な項目を選び、また会話の中での使用を意識しながら練習したことで、学習者の関心を引くことができた。またペアでの会話練習では、モデル会話を文字で提示しなかったことで、それぞれのペアで異なる会話となっていた。会話練習中には学習者の発話の評価・訂正や質問への対応を行った。その際に学習者から「会話をどのように終えればよいか。」という質問があり、モデル会話にはない「また○曜日。」を導入した。この項目は、授業終了後にも積極的な使用（「また来週。」）が見られた。学習者が会話の場面に応じて「言いたい」と思ったことを導入したことで、積極的な使用・定着につながることができたと考える。

一方で、反省会において、「学習者の誤りに対する訂正が不十分だった」というコメントがあった。今回の授業で行ったような学習者が主体となる会話練習では、教師の積極的な評価・訂正が非常に重要な意味を持つだろう。さらに、学習項目の定着の確認まですることができれば理想的であった。これらは自身の今後の課題として改善していきたい。

### 3.5 2回目の教壇実習を終えて

2回目の教壇実習を振り返ると、各自の授業の質は1回目に比べ少なからず向上が見られた。その一方で、反省会で「3コマの授業の繋がりが見えなかった」と指摘されたように、3コマの授業担当者の連携は不十分であった。チーム・ティーチングでは、メンバー間でよく打ち合わせをし、連携して一連の授業を行うことで、段階を踏みながら学習目標の達成を目指すことができる。この利点を活かすことができなかつた点は今回の反省点である。

## 4. おわりに

場面シラバスを用いてコミュニケーションのための日本語を教えることを目標に、グループで授業内容を1から検討することは大変なプロセスであった。2回の教壇実習を終えて、反省すべき点や後悔は数多くあるが、より自然な日本語を教えるためにグループで積極的に意見交換をし、時には言語使用の実態調査を行い、共に試行錯誤を重ねたことは決して無駄ではなかったと考える。この教育実習から得た貴重な経験を今後の教育活動にも活かしていきたい。

## 日本語教育実践研究 2 実習報告 (B)

肖 宇彤、孫 芳兵、唐 欣然

## 1. はじめに

本稿では、平成 29 年度日本語教育実践研究 2 において、筆者らが行った教壇実習について報告する。6 週間に渡る授業の中で筆者らは第 2 週と第 5 週を担当した。

## 2. 1 回目の教壇実習

## 2.1 1 回目の授業

実習の 2 週目の授業を担当した。日本に滞在している日本語学習者を対象に行なったアンケート調査の結果から、学習者が難しいと答えた「道を尋ねる」というテーマを選んだ。3 コマの授業を通して道の尋ね方やビルの中の店の場所の尋ね方を身につけ、相手の答えが聞き取れるようになるという目標を設定し、3 コマの授業の流れと内容を決定した。

表 1 1 回目の授業概要

|                 | 学習目標   | 学習項目   |
|-----------------|--|--|
| 1 コマ目<br>(担当：肖) | ①人を呼び止めることができる。<br>②わからない場所を通行人に質問できる。<br>③説明内容を聞いて理解することができる。 | 運用できる：<br>・「あの、すみません。」／「ちょっと、すみません。」<br>・「(場所) へ行きたいんですが…。」<br>聞いてわかる：<br>・左/右に曲がる。坂で曲がる。橋を渡る。<br>・(V る) と～にありますよ。 |
| 2 コマ目<br>(担当：孫) | ①道を尋ねることができる。<br>②行き方に関する答えが聞き取れるようになる。<br>③電車の乗り換えを理解する。      | 運用できる：<br>・「N (場所) にどうやって行きますか。」／<br>「どうやって行けばいいですか。」<br>聞いてわかる：<br>・「(V る) と」・「(V て) ください。」<br>・「N に乗り換える」        |
| 3 コマ目<br>(担当：唐) | ①建物の中で自分が行きたいところを日本語で聞くことができる。<br>②説明の中で、単語を聞き取り場所を推定できるようになる。 | 運用できる：<br>・「～は何階にありますか。」<br>・「このへんに～はありますか。」   |

## 2.2 1 コマ目

### 2.2.1 準備したこと

最も工夫した点は場面設定である。自然な場面を設定し、そこで使われる文型を導入し練習を行うために、日本語母語話者に何度も確認を行った。また、新しい文型を理解させるために、英訳付きの絵カードを作った。教案は、指導教員からコメントをもらって修正を行ったうえで、実際の授業の流れを考えながら修正を重ねた。

### 2.2.2 達成できたこと

1回目の教壇実習を通して達成できたことを以下に挙げる。

- 英訳を使いながら文型や新出単語を導入したため、文型や単語の意味を理解させることには困難を感じなかった。しかし、直接法で実習を行うという方針からはかけ離れているため、今後は検討が必要である。
- 学生の反応に注意を払いながら授業していたので、学生と積極的なインターアクションを行うことができた。

### 2.2.3 反省点

反省点を以下に挙げる。

- 教師の指示が不明瞭な箇所があり、学習者が練習の方法を理解できない場面があった。
- 文型の意味を説明する際に、難易度の高い言葉を使ったため、学習者が理解できない場面があった。

## 2.3 2 コマ目

### 2.3.1 準備したこと

授業でより自然な会話を教えるために、実際にリサーチをした上でモデル会話を作成した。また、3コマの繋がりをわかりやすくするために、教案を作る段階からグループで何度も打ち合わせをした。さらに、授業で使用する小道具や絵カードを準備し、グループでリハーサルを行って、授業の流れを確認した。

### 2.3.2 達成したこと

授業を通して以下の2点を達成することができた。

- 学習者が道の尋ね方を身に付け、目的地への行き方を聞き取れるようになった。
- クラス全体の雰囲気がよく、学習者が積極的に発話していた。

### 2.3.3 反省点

授業を準備する際に、教えたい内容を詰め込みすぎてしまった。そのため、用意した内容は全て導入したもの、十分に練習を行うことができなかった。さらに、授業中に学生の様子を確認することよりも、準備した教案の内容を導入することに追われてしまった。授業の後半では、用意した内容を無理矢理詰め込むことになってしまった。その結果、学習者を困惑させてしまった。

## 2.4 3 コマ目

### 2.4.1 準備したこと

学生に自然なモデル会話を教えるために、モデル会話の作成を工夫した。モデル会話の内容や表現について事前にリサーチを行った。モデル会話の場面は「イーアス (ショッピングセンターの名称) で映画館と ATM の場所を聞く」であるため、実際に現地へ行ってインフォメーションで場所を尋ね、その会話のやり取りを記録した。それに基づいてモデル会話を作成した。さらに、モデル会話で扱う文型を導入するために、練習カードを用意した。

### 2.4.2 達成できたこと

授業を通して以下の 2 点を達成することができた。

- 学習者にとって理解しやすい内容にすることができた。
- 練習の時に、クラスの雰囲気を盛り上げることができた。

### 2.4.3 反省点

最後のペア練習で練習した会話を発表させる際、筆者が指名するのではなく、挙手制で発表者を決めた。しかし、そこで挙手したのは学習経験のある学習者だけであった。できる学習者だけではなく、ゼロ初級の学習者にも発表させることで自信をつけさせるきっかけにすることもできたのではないかと反省した。

## 2.5 1 回目の教壇実習を終えて

1 回目の教壇実習を終えて、授業でより学生を中心に授業内容を柔軟に変えることの重要性を改めて認識した。教師は授業前に必ず授業内容を考え教案を作るが、授業内では予想できないことがたくさん起こる。そのため、授業では教案に従うだけでなく、学習者の反応をよく見て、授業内容を柔軟に変えるべきであると学んだ。学習者のペースに合わせて授業を進めれば、学習者にとって最も勉強になる授業になるだろう。

## 3. 2 回目の教壇実習

### 3.1 2 回目の授業

2 回目の教壇実習は第 5 週を担当し、病院と薬局で医者と薬剤師との会話を授業内容として設定した。1 コマ目の授業では受付でのやり取り、問診票の取り扱い方について取り上げた。2 コマ目の授業では診察を受けるとき、医者とのやり取りのやり方を中心に取り上げた。病院へ行く場面の流れを考えた上で、3 コマ目の授業内容を薬局で薬を買うことと設定した。



表2 2回目の授業概要

|                | 学習目標  | 学習項目  |
|----------------|---|---|
| 1コマ目<br>(担当：孫) | ①病院やクリニックで受付の時に必要とされる日本語を身に付ける。<br>②問診票の基本的な書き方がわかる。<br>③病院での [受付] → [待合室] → [診察室] → [待合室] → [会計] → [薬局] という順番がわかる。 | 運用できる：<br>・「～が痛いです。」<br>聞いてわかる：<br>・「ここは初めてですか。」  |
| 2コマ目<br>(担当：肖) | ①病状の説明ができる。<br>②医者への質問がわかる。   | 運用できる：<br>・「咳が出る」 / 「～が痛い」 / 「～度～分 (体温)」<br>聞いてわかる：<br>・「診察を受ける。」<br>・「体温を測る。」<br>・「様子を見ましょう。」                                |
| 3コマ目<br>(担当：唐) | ①薬局で薬剤師の説明を聞いて理解できる。<br>②ドラッグストアで薬を買うことができる。  | 単語：<br>理解語彙：処方箋、お薬手帳、一日一回・一日二回・一日三回、食前・食後・寝る前、液体、カプセル、錠剤、粉薬<br>使用語彙：効く、薬<br>運用できる：<br>・「何か (いい薬) ありますか。」<br>・「(よく効くの) をください。」 |

### 3.2 1コマ目

#### 3.2.1 準備したこと

授業でより自然な会話を教えるために、実際にリサーチを行い、その結果に基づいてモデル会話を作成した。また、各自が作成した教案をグループ内で何度も検討し、指導教員の指導を受け修正を重ねた。グループでリハーサルを行って実際の授業の流れを確認した。

#### 3.2.2 達成したこと

2回目の授業では以下の2点を達成することができた。

- 学習者に問診票の基本の書き方を理解させることができた。

- 病状を伝えるための基本的な表現を身につけさせることができた。

### 3.2.3 反省点

反省会を通して、授業の要点をはっきりさせることが重要であると気づいた。2 回目の授業では「問診票を書くことができる」を一つの大きな目標と設定した。しかし、問診票の項目すべてが要点ではなかった。授業内でそれを学習者に示すことができなかつたために、授業内で問診票のすべての項目を書かせる結果となった。そのため、会話の練習時間を十分に確保することができなかつた。

### 3.3 2 コマ目

#### 3.3.1 準備したこと

授業の前に以下の 2 点を準備した。

- 文型を理解させるために、英訳付きの絵カードを作った。
- 教案を作成し、指導教員からコメントをもらって修正を行ったうえで、実際の授業の流れを考えながら修正を重ねた。

#### 3.3.2 達成できたこと

2 回目の授業では以下の 2 点を達成することができた。

- 場面をわかりやすく提示することができた。それにより、学習者に病院での会話の流れをスムーズに理解させることができた。
- 前回の授業での問題点を改善することができた。

#### 3.3.3 反省点

反省点は以下の 2 点である。

- 学生が質問をした際に、それを無視してしまった。
- 導入内容が多すぎて、練習の時間を十分に取れなかつた。

### 3.4 3 コマ目

#### 3.4.1 準備したこと

学生に自然なモデル会話を教えるために、モデル会話の作成を工夫した。事前に授業の内容にあわせてリサーチをした。また、学習者がゼロ初級であるため、難しい内容を避けて、できるだけ簡単な文法と単語を使ってモデル会話を作成した。授業に合わせて絵カード、文法カード、パワーポイント、練習シートを用意した。

#### 3.4.2 達成できたこと

2 回目の授業では、モデル会話の内容が自然ですぐに理解できるものであった。

#### 3.4.3 反省点

反省点は以下の 2 点である。

- ウォーミングアップとクロージングがあつた方が良かった。
- 板書をもっと工夫する必要があるあつた。

### 3.5 2 回目の教壇実習を終えて

2 回目の教壇実習を終えて、指導案の作成、教師が教壇に立つときの振る舞い、板書の作り方などいかに重要であるか改めて感じた。学習者が何を勉強したいか、教師が授業で何を教えるか、何を理

解させるか、また、何を覚えさせるかを明確にしたうえで指導案を作成する必要がある。そうすることで、学習者のニーズに合わせて難易度を調整しながら授業を行うことができるようになると思われる。これから日本語教育現場で教育を行うためには、練習と反省を重ねて行く必要があると実感した。

#### 4. おわりに

実際の教育現場で教えた経験が全くなかった筆者らは、今回の教壇実習で日本語教師の仕事とは何かを実感した。日本語能力が高いだけでは日本語を教えることができない。教師として、学生を中心に、学生の日本語レベル・ニーズ・理解力などを考慮しなければならない。これからも日本語教育について研究を行うと同時に、日本語教育に関する知識そのものだけでなく、教師の視点からどのようにその知識を教えればいいのかを考えて行きたいと思う。

#### 参考文献

横溝紳一郎(2000)『日本語教師のためのアクション・リサーチ』凡人社

## 日本語教育実践研究2 実習報告 (C)

古 君瑶、呉 楊、彭 祐祥

## 1. はじめに

本稿は、筑波大学大学院人文社会科学研究科国際日本研究専攻日本語教育学学位プログラムで行った「日本語教育実践研究2」の報告である。本実践研究において3人の実習生は2回（2017年6月8日、2017年6月29日）の教壇実習を行った。日本で生活する上で最低限必要となる指導を目的に、第1回目の授業では「アパレルショップでの買い物」、第2回目の授業では「食事に誘い、レストランで使う日本語」を中心に指導した。

## 2. 第1回目の教壇実習

各コマの授業はそれぞれ担当者が異なるが、原則として岡崎敏雄・岡崎眸（1990）が指摘する「コミュニケーションアプローチ」の言語学習観を参考に授業を設計した。

## 2.1 第1回目の授業概要

第1回目の授業は、日本語教育実践研究2での教壇実習の3週目に実施し、学習者が日常的な生活場面での問題を解決する時に使える日本語の指導を前提としてシラバスを作成した。「アパレル店での買い物」の場面に基に、下表1のように学習目標と学習項目を設定した。

表1 1回目の授業概要

|                | 学習目標                                 | 学習項目                                       |
|----------------|--------------------------------------|--|
| 1コマ目<br>(担当:古) | 一人で買い物ができる（アパレルショップ）。<br>試着することができる。 | ～してもいいですか。                                 |
| 2コマ目<br>(担当:呉) | 店員に服の色、柄、及びサイズなどの要望を伝えることができる。       | ①～がありませんか<br>②～のがほしいんですけど<br>③～サイズがありませんか。 |
| 3コマ目<br>(担当:彭) | 裾上げサービスを頼むことができる。                    | ～をお願いします。<br>～分後にまた来てください。                 |

## 2.2 1コマ目

## 2.2.1 授業概要

第2週の「道を尋ねる」の授業では、指導項目の難易度が学習者のレベルに対応していなかったことから、答えに窮するなどの反応を見せていたため、学習者の負担を軽減するべく、試着時に使う日本語を学習項目として設定した。アパレルショップにて、店内で店員に試着したいと希望を伝え、続けて「買う」か「買わない」かという意味を伝えることを目標とし、以下の流れで授業を行った。

- ① 買い物のテーマを導入し、「アパレルショップ」を提示し、試着のシチュエーションに引き込む
- ② PPTの写真と英語でイメージを見せながら、単語を導入する。
- ③ モデル会話1の導入、説明、練習
- ④ モデル会話2の導入、説明、練習
- ⑤ 新出単語と合わせての会話練習と復習

## 2.2.2 達成点と反省点

授業後に行った実習反省会では、指導教員やティーチング・フェロー、実習を一緒に行った観察者から、「PPTと絵カード、実物で単語を導入、練習、復習していた点がよかった。」「授業の雰囲気が良かった。」「仮名が読めない学習者も付いて来られていて良かった。」といったコメントが寄せられた。つまり、日常生活に出現する場面の導入により、まだ日本語能力をそれほど持っていない学習者も授業で習った表現を使用することができたということから、岡崎ら(1990)が提唱する「文脈前提」の指導による効果が認められたと言えるだろう。一方、改善点として「時間が余っていた。」「店員の話は聞いてわかればいいレベルなのだから、学習者に無理に話させないほうが良いのではないか。」「内容が少し簡単なのではないか。」などのコメントも寄せられた。つまり、「構文・音声・語彙」において学習者に正確さを求めすぎており、コミュニケーションアプローチの指針と乖離していると指摘を受けたのだが、学習者の日本語能力に合わせ、必要最低限の言語知識を提供することは、授業を円滑に進める上で必要不可欠である。そこで会話の内容をより学習者にとって興味深いものとし、会話の自由度を高めることを目的とした単語の導入をするという視座を基に、授業改善に取り組むことにした。

## 2.3 2コマ目

### 2.3.1 授業の概要

アパレルショップの場面において、店員と円滑なやり取りをすることは、初級レベルの学習者にとって極めて困難である。そこで、1コマ目の授業で指導した内容を復習した上で、「服の交換」に焦点を当てて2コマ目の授業を行った。授業の内容は、客が試着する時、店員と服の色、花柄及びサイズの交換ができることを目標として、以下の流れで授業を行った。

- ① 服の色と柄に関わる単語と表現の導入および練習
- ② 1コマ目で導入した洋服の表現を確認しつつ、場面を理解させた後に、モデル文(前半)を導入。また、代入ドリルを使い、モデル文(前半)を定着させる
- ③ モデル文(後半)に出てくる新出語彙と表現を導入
- ④ 会話の流れを復習した後で、学習者をペアにし、ロールプレイを実施

### 2.3.2 達成点と反省点

学習者の生活上頻繁に行われる買い物の場面を設定したことで、現実場面に即した日本語を指導することができたと考えている。絵カードやPPT資料の素材などでも実生活で使われるものを活用したことによって、学習者は習得した語彙を日常生活で直ちに活用できるのではないかと思う。しかしながら授業後に行われた反省会では、「色や柄など新出語彙が多すぎる。」「新出語彙の導入にかけた時間が長すぎ、コーラスを何回も繰り返してしまったので、単調に感じて飽きてしまう学習者もいた。」「学習者に未習語彙を説明するとき、複雑な言葉を使っていた。」などのコメントが寄せられた。つまり、学習者主

導であるべき所が、実際には教師主導になってしまい、学習者の動機づけに焦点が合わせられていなかったという問題点があった。当日の学習者の反応を鑑みれば、導入した新出単語と文法の内容が、学習者のレベルと比較して難しかったことが明らかであったし、学習項目を習得させるために、何回もコーラスを行なったが目立った効果は確認できなかったことから、今後の授業では、学習者の進行する状況を見ながら内容を柔軟に調整し、臨機応変な対応能力を向上させる必要があるという視座を得るに至った。

## 2.4 3 コマ目

### 2.4.1 授業の概要

教壇実習の前に行われたミニティーチングの反省会では、筆者の授業について「教えるものが多すぎて何がポイントかわからない」「単語だけ教える授業になっていた」といった指摘がなされた。新たな授業で同じ問題を起こさないために、授業の内容をなるべくシンプルにし、単語ではなく表現に重点を置く方針に変更した。また、学習者に楽しく学習できる環境を提供するため、スライドを利用し、授業に様々な楽しめる要素を取り入れた。具体的な授業の流れは以下の通りである。

- ① 1 コマ目で出現した単語を復習し、少量の新出単語を導入
- ② 店で服を買う手順や使う日本語を復習
- ③ 裾上げの依頼方法と待ち時間を導入
- ④ 1 回目の授業のまとめや復習

### 2.4.2 達成点と反省点

授業後に実習生と指導教員で開いた反省会で、良い点として、「授業内容は1 コマ目と2 コマ目と上手く繋がっていた」「面白い授業ができていた」「学習者とのやりとりが多く、雰囲気良かった」などのコメントを得ることができた。次に改善点として、「全体的に早口だった」「内容が少し足りなく、同じ授業を2回繰り返すようになってしまっていた」「授業が終わった時に「いい先生」と言われたが、早めに終わったためがっかりした学習者もいた。」「単語だけ教える授業になってしまっていた」などのコメントが寄せられた。今回の指摘で最も重要なものは、「単語だけ教える授業になってしまっていた」という指摘だろう。繰り返し指摘を受けている点であるため、最も注意すべき点として改善に取り組むべきという視座を得ることができた。

## 2.5 1 回目の授業を終えて

アパレルショップの場面で、色や柄を交換したり、裾上げをお願いしたりする時に使う慣用表現と関連文型を導入したことにより、日本での生活に役立てる表現を伝えることができたと思われる。しかし、授業において臨機応変に対応する能力や、ティーチャートークを使用しすぎてしまうといった問題も改善する必要があり、更なる授業のレベルアップに向けて、これらの問題への対応を反映させて、授業を展開する必要があるという問題意識を得るに至った。

## 3. 第2回目の教壇実習

### 3.1. 第2回目の授業

第2回目の授業においては友人を食事や映画に誘うことや、レストランでの店員とのやりとりの他、

様々な場面において問題を解決したり、クレームを相手に伝えたりすることができるようになることを目標に設定し、教案を作成した。3コマの学習目標と学習項目等の授業概要を下表2にて示す。

表2 2回目の授業概要

|                 | 学習目標                         | 学習項目  |
|-----------------|------------------------------|---|
| 1 コマ目<br>(担当：古) | 食事、映画、買い物に誘うことができる。          | 一緒に～を食べませんか。いいですね。<br>～ましょう。何時がいいですか。             |
| 2 コマ目<br>(担当：呉) | レストランで注文できる(店員の話しを聞いて分かる程度)。 | ①～をください。あと、～を二つください。<br>②「何名様でしょうか。」「決まったら～ください。」 |
| 3 コマ目<br>(担当：彭) | クレームを言えるようになる。               | ～んですけど  |

### 3.2 1コマ目

#### 3.2.1 授業概要

1コマ目では、前週で郵便局へ誘うことを指導していたため、食事に誘うことを基本的な内容と設定し、学習者が食事へ誘うタスクを達成できた場合は、カラオケ、買い物、映画に誘うというタスクへと発展できるよう、学習目標を設定した。また、より現実場面に近づけるため、誘いや承諾、断りができるように目標を設定し、以下の流れで授業を実施した。

- ① 誘いというテーマの導入。
- ② PPT や絵カードで新出単語を導入し、練習。
- ③ モデル会話を導入し、練習。
- ④ 他の場面の誘い、および承諾、断りの練習。

#### 3.2.2 達成点と反省点

反省会では、指導教員やティーチング・フェロー、実習を一緒に行った観察者から、「学習者の質問にちゃんと対応していた。」などが良い点であったとコメントが寄せられた一方、「会話を読ませるような形で授業が終わっていた。学習者が本当に言いたいことが誘導できていなかった。」「ティーチャートークが英語に頼りすぎている。」「練習をもう少し工夫したほうが良い。」「モデル会話が長かった。区切って教えた方が良い。」などが改善点として挙げられた。つまり、1回目の「文脈前提」の方針と異なり、実際の授業ではドリルの導入が中心となってしまう。

### 3.3 2コマ目

#### 3.3.1 授業の概要

2コマ目の授業では、前回の授業の反省点を踏まえ、学習者を中心とした授業を行うこと、学習者の能力に適応した方法を導入することで、学習者全員に発話のチャンスを与えることを目的としていた。そこでレストランで注文ができることを学習目標に設定し、以下の手順で実施した。

- ① 食べ物の絵カードを使って、レストランで基本的な表現を導入。

- ② 学習者に身に付けさせる文法項目と、聞いてわかる文法を分けて導入。
- ③ モデル文を導入し、代入ドリルで会話を定着。
- ④ ロールプレイでモデル会話の定着状態を確認。

### 3.3.2 達成点および反省点

同じクラスにおいても、日本語学習歴や学習意欲の影響で、各学習者の日本語能力が異なっているということに気づき、教師の質問に即答できる人とできない人両者ともに練習の機会を与えるようにすることで、授業時間を有効に使うことができたと思われる。また、ジャスチャーや身振り手振りなどを活用し、会話を簡単に説明できるように工夫した。一方、反省会では「学習者が誤ったところを強調しながら、ゆっくり説明すればよかった。」「英語を使う頻度が高かった。」などのコメントが寄せられた。適度であれば媒介語を使用してもコミュニケーションな授業進行は可能となるが、実施した授業では英語を使用する頻度が高かったため、改善点として今後の活動では注意しなければならないだろう。また、同じクラスにおいても、能力によって即答できる人とできない人がいるため、どのようにバランスを取って指名するか、質問の仕方を学習者のレベルに合わせて調整することが必要であるという問題意識を得ることができた。

## 3.4 3 コマ目

### 3.4.1 授業の概要

1回目の授業と同じく、学習者に楽しく学習できる環境を提供するため、スライドを利用し、授業に様々な楽しめる要素を取り入れた。また、1回目の授業の改善点を踏まえ、なるべく発話速度を下げ、学習者が聞き取りやすいように工夫した。具体的な授業の流れは以下の通りである。

- ① レストランで注文をしたものの料理が出てこない」という場面を導入
- ② 1回目の授業で導入した「待ち時間」を復習
- ③ 「言いさし」表現の導入、練習（レストラン以外の場面での練習）
- ④ 2回目の授業のまとめや復習

### 3.4.2 達成点と反省点

授業後の反省会で、良い点として、「面白い授業ができた」「学習者とのやりとりが多く、雰囲気が良かった」などのコメントが寄せられた。次に、改善点として、「面白さを追求しすぎて、不自然な場面が多数あった」「内容は1回目より多くなっていたが、やはり不足しているという問題があった」などのコメントが寄せられた。1回目の授業と比べて、早口は改善されたが、依然として内容が不足しており、また、改善点としてあげられた「面白さを追求しすぎた」という点が最も改善すべき点であったと考える。「言いさし」表現が様々な場面で使えるということを伝えるため、「友人がおならをした時」「自分のバイクが盗まれそうな時」など、面白い場面を導入し、単語を教える授業になることを回避することはできたが、文脈的な正しさを失ってしまった結果となった。このような設定は学習者の笑いを取ることには成功したが、学習者の日常生活に起こる出来事とは言い難いだろう。

## 3.5 2回目の授業を終えて

2回目の授業を終えて、食事に誘う、レストランで注文したり、クレームを述べたりする時に使う語彙、表現を指導でき、最終的には学習者に楽しい授業の雰囲気を提供できたのではないのかと思われる。



しかし、語彙選択、時間配布、ティーチャートークなどの点について未熟な点が多く、今後これらの点を改善することを模索していかなければならないだろう。

#### 4. 終わりに

6週間の実習を通して、教師としての学習者募集、学習内容の決定、教案作成、教具作成、実際の教壇実習を体験することができた。また、学習内容を選択する時に、学習者の興味関心、日本語レベルに合わせて作成することの大切さと難しさも体験することができた。一方で、難しい日本語に頼ってしまったことや、教師の発言が多くて学習者の発言をあまり誘導できなかったなど、授業方針のコミュニケーションアプローチに相違した点に加え、授業の時間配分や内容調整がうまくいかず、学習者の反応や質問に臨機応変に対応できていなかったのではないのかという問題意識を、指導教員及び他の実習者の協力により得ることができた。以上の点を今後に向けた改善点とし、本実習における報告としたい。

#### 参考文献

横溝 紳一郎 (2000) 『日本語教師のためのアクション・リサーチ』 凡人社

岡崎敏雄・岡崎眸 (1990) 『日本語教育におけるコミュニケーション・アプローチ』 凡人社